

# シベリヤ収容所

大星 浄

上高田一丁目

昭和二〇年九月（一九四五年）、私達の乗った列車はハルピンよりマンチュウリを北上して、シベリヤに向かって行く。戦争が終わった喜びは一転して、暗雲のたちこめる冷たい落胆の心境に皆の心が変わってしまった。我々は干し草とアンペラを敷いた貨車に詰め込まれて、各自一枚の毛布にくるまってザコネだった。夜になると冷たく軋みながら列車は平原を北上し走り続けて行った。暗い列車に揺られていると、日本にいたときのこと、走馬燈のように儼に浮かんで来る。

昭和二〇年二月二八日に、入隊の電報が勤務していた溝ノ口の会社の寮に、静岡の母よりおくられてきた。このころは毎日のように京浜地区は空襲が続き、焼け野原となった。もうこの戦争は負けるのではないかという噂が、あちこちから聞かれ暗い不安な日々であった。

三月三日広島に集合し、軍服に着替え、迎えの兵士に引率されて満州（中国東北部）に向かった。朝鮮半島を経て満州北部のチチハルへ、それから北西シラルギ駅に着き、トラックの

荷台に詰め込まれて部隊に向かった。寒さは想像以上だった。

入隊して初年兵教育が始まった。気持ちが悪いほど親切丁寧にお客扱いするのが習わしとか。入隊四日目からの内務生活、日々の教育、訓練、夕食後の私的制裁は、筆舌では表すことができない毎日の生活だった。不合理と痛さ、苦しさとに耐える日々だった。思い出してもゾツとする。班長、古兵のシゴキが昼夜五か月、来る日も来る日も続いた。手で殴るのはあたりまえ、櫂の棒、幅広のバンド、皮のスリッパで殴る、蹴るだった。その理由も、答える声小さかったり、動作が鈍いとか常識では考えられないホンの些細なことだった。叱る本人のその日の気分と感情での私的制裁が行なわれた。ある兵士など、顔は腫れ上がり体は痣だらけだった。

八月九日出動命令が下り、ソ連軍との戦いが始まった。これで命も終わりだと思った。頭にかぶる鉄兜がない、銃があっても弾がない、これで戦いをしなければならぬ無謀さ、世界に

誇る関東軍とは名ばかりで情けない、肉弾戦で死んでいく方法しかもうないと諦めた。毎日が塹壕掘りだった。真つ暗闇の塹壕の中の守備の怖さは針の音でも身震いするほどだった。平原の彼方で真つ赤に燃えて「ドーン、ドーン」と、はらわたに響く音、また遠く近く砲弾の炸裂する音が、闇のなかで聞こえては消されていった。

八月十五日の終戦のラジオをかすかに聞いたけれど、関東軍はあくまで戦うのだ、という命令だった。今度は戦死（大死）だ、と覚悟をした。

何日か過ぎてから再度の終戦命令を聞き、チチハルに集合させられ武装解除となった。町の中で、日本人婦女子の泣き叫んでいた声は今でも耳に残って消えない。「助けてくれー」「一緒につれてってー」「殺してくれー」などなど……。

ソ連兵に囲まれ収容されて行く我々には、どうすることも出来なかった。敗戦の惨めさを痛切に感じ、戦争は絶対してはならないということが、ソ連に抑留されてから嫌というほど身にしみた。日時の記憶は定かではないが、三週間ぐらい列車に乗っていたと思う。

ある駅で下車させられ、満足に数も数えることができないソ連兵に「ダワイ（早く）、ダワイ」とせかされて入れられたのが、クラスノヤルスク収容所だった。板塀と鉄刺線に囲まれ、所々に監視所があった。平屋の長い棟がつらなり、中は二段ベ

ッドが並んでいた。全部で二千人位いたと思う。一棟は三〇メートル位でペーチカが二か所にあったが、石炭がなく、外の作業から帰った者が持ち帰るわずかの木材や石炭を焚いても夜間の三時間ほどしかもたず、与えられた二枚の毛布と自分の衣類の総てにくるまって、暖をとるしかなかった。十月も過ぎると零下三〇度は暖かい方で、零下六〇度にも下がった。太陽は見えぬ空気は凍り霧がかかったような薄暗い毎日だった。屋外作業者は全員といていいほど、耳、鼻、手足の指先が凍傷にかかってしまった。火傷と同じで皮膚がずりりと剥けてしまう。治療はチンク油をぬるだけだった。ひどいになると手足を切断する人もいた。予防方法としては手足を常に動かして、顔はマッサージすることだった。体力と気力を失ってそれが出来ない人もいて「おい、顔が赤いぞ」といわれてマッサージされる人もいた。さすがに零下四〇度を越えると屋外の作業は中止になった。

食事は捕虜規定とはほど遠く、毎食燕麦を粉にして作ったスープが一合ぐらいで、冷えると糊状になった。たまには薄い黒パンもあった。極寒の冬は輸送が滞って食料が入らなくなり、一日一食の時もあった。また夏など塩漬けの魚を一匹生で食べさせられた。貨車から大豆を荷下ろしにでかけたときなどは、ポケットに入るだけいれ持ち帰った。煎ることが出来ないので生で食べたが、味はピーナツのようだった。あの青臭さは

どこへ？食べ過ぎてしまった後は下痢だ。わかっていても何時もひもじい思いでいるので食べてしまう。飢えると口に入る物はなんでも美味しく食べられるのだとわかった。こんな生活の連続だった。飢えと寒さで栄養失調になり、大勢の人達が死んでいった。病床で死んでいく人の最後の言葉が、「もう俺はだめだ、おいしいものがたべたいな」だった……。厳寒と飢餓と重労働に加え、軍隊組織の状態で働かせられた下級兵の四重、五重の苦しみと犠牲でもあった。死体は裸で毛布に包んで運び、埋められると聞いた。冬は地面が凍り、掘ることが出来ないのに雪を被せたとのことだ。送る友は泣く涙を流す力もなく、体は筋肉もなく骨と皮で、まるで生きた骸骨の姿だ。あすは我が身かもしれない。呆然とするばかりで考える力はなかった。よく生きていられるもんだ。「そうだが自分は絶対生きて帰るのだ」と、いい聞かせて頑張った。トイレは棟と棟の間に小屋があり幅二メートル、長さ五メートル、深さが四、五メートルほどの穴に、所々に丸い穴を開けた板が渡してあるだけだった。冬になると尻につくほど、大便秘が凍って盛り上がってくるからカチカチに凍った便を、ツルハシとシャベルでかきわって捨てに行った。凍っている時は臭いはしないが宿舎に帰ると、衣類に付着した汚物がとけて臭いだし、その臭さには閉口した。洗面所と水場は外なので顔を洗うこともしなかった。歯を磨くことなど、いつの間にか忘れてしまった。

年が明けた頃から、これこれの仕事が終われば日本に帰れると言われ、期待したが、どんなに一生懸命能力をあげても、その都度それは裏切られた。「嘘つきのロスケ」と皆は地団太を踏んだ。裏切られているうちに日本に帰れることが信じられなくなった。

翌年の夏に、コルホーズ（農場）に百人位草取りにでかけ、私もその中に入った。シベリヤのこの時期は暗い夜が二、三時間、月があれば闇夜がないので時間がまったく分からない（時計は全員収容所で取り上げられた）。ロシア人のボスが明るくなると、「ダワイ、ダワイ」といつて起こしにくるが、くたびれて起きられなかった。毎日仕事の終わるのは夜暗くなる頃だった。太陽が昇ると気温がどんどん上がり三〇度にもなる。こんどはブヨの大群だ。肌の出ているところはすべて黒くうずもれてしまう。いたがゆくてたまらないが、たたいては仕事にならないので、上着をスツポリ頭からかぶり、目と指さきだけを出し草取りをした。皮膚の弱い人は目と顔が腫れて仁王様のような顔になった（ロシア人は網の帽子を被っていた）。このために収容所に帰ってから全員マラリヤに罹り、死んでしまった人もいる。私は朝起きる頃震えだして一時間くらいたつと四〇度の熱が出た。その時の悪寒は耐えられなかった。

二年ほどした六月ごろ、第一回の帰国者の発表があったが病人だけだった。七月の第二回のなかに、私は栄養失調で選ばれ

た。帰国の夢はナホトカまでだった。「体は大丈夫か」と聞かれ、大丈夫だと答えたら森林伐採地行きに回されてしまった。

三〇人ばかりだったと思う。ガツクリして誰一人として口をきく者はいなかった。つねづねこの仕事に行くのは死あるのみと聞かされていたからだ。三時間ほど列車に乗り、下車し、一時間ぐらい歩いた山の中だった。一行はテントの中へ入りグツタリと座り込んだ。

山では食べられる物は何でも食べた。野草や、飯盒で茹でたデンデン虫は御馳走だったが、一週間もしたら食べつくされ、一匹もいなくなってしまいガツカリした。

十月下旬の夜、「ダモイ（帰国だ）、ダモイ」とソ連兵が農夫と一緒に呼びに来た。今度こそ本当だろうね、と皆半信半疑の顔を見合せた。年離れた農夫は真夜中なのに、我が子を送るごとく皆の荷物を喜んで馬車にぎっしり積んで山を下りた。親切にしてくれた農夫に皆が感謝の礼を述べた。三時間位の汽車の旅は夢のようだった。

ナホトカ港に停泊中の興安丸に乗船してから始めて、今度こそ本当に日本に帰れると実感した。迎えてくれた看護婦さんのさしのべてくれた手の暖かさは、忘れることが出来ない。ああ生きて帰れるのだ。生きていて良かったと思った。その時の白衣のまぶしさと口紅の美しさが印象に残っている。安心と疲れがどっと出て何も知らずに眠り続けた。船は静かにそして確実に

に、日本へ向かっていた。誰かが「日本だぞー！」と叫んだ。山々は紅葉に染まって赤かった。柿の実も見えた。永い年月だった。やっと日本へ帰って来れたのだ。未だ帰らぬ友と永久に帰らぬ人を残して……。

昭和二年十一月一日舞鶴港に上陸、四日にふるさとの静岡に帰る。

母は涙してよろこぶ。明ければ二十三歳の春だ。

